

平成 27 年 12 月 24 日

調 査 ・ 研 修 報 告 書 (会派個人用)

会派名：清政会

報告者：近藤久子

実施場所：広島市留学生会館

実施日：平成 27 年 12 月 19 日～20日

■ 目的・課題問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状 など）

「被爆 70 年 ジェンダー・フォーラムin広島」に参加。

- 「広島・ヒロシマ・広島」をジェンダー視点で検証し、討論し、展望するために、広島市立大学・広島修道大学・中国新聞記者・大阪大学・一橋大学・広島大学・津田塾大学・琉球大学・明治学院大学・九州大学・大妻女子大学・トロント大学・ジュネーブ大学・立命館大学から、それぞれの専門分野における研究発表が、実に 23 人の登壇者によりあった。
- 市民、学生、研究者が集い、思考する広島へと一歩進めるため、準備に 2 年を要した会である。被爆県に住みながら、全く耳にしたことのない情報は、「平和」を語ることの責任を問われるものであった。被害者は日本人だけではない。

■ 参考とすべき事項 ■ 提言・その他

- 1950 年代初めから、ヒロシマの表象として「記憶の女性化」「平和の母性化」が際立ち「原爆乙女」「嵐の中の母子像」「サダコ」「夢千代日記」がその 1 例である。「積極的平和主義」と書かれた現在の自衛隊員募集のポスターには、女性自衛官がシリア系の女の子に折り鶴を渡している。過去において、1942 年アジア太平洋戦争時の政府刊行物の表紙に、マレー系の女の子に女性の看護師が優しく本を読み聞かせている。この全く同じの構図から、我々は何を読み取るのか。聖なる戦争はあり得ない。平和=母(母性)と結びつけられることが多い。
- 慰安婦問題といえば韓国人のケースが今問題になっているが、日本人の慰安婦の存在は不可視化されている。
- 「核抑止論」が影響力があるとされるのは、第 2 次世界大戦を終結させた「威力のある兵器」としての核兵器感が定着しているからではないか。核による脅しによって「平和の均衡」が保たれるという発想に対して、一人ひとりの人間に何が起こったのか現実を見、検証が必要。
- 「集団的自衛権による抑止力」と「核抑止力」には共通性がある。相手国にとっては抑止論こそが脅威になる。「抑止(脅し)による積極的平和主義」。「一億総活躍社会」どころか「一億総動員社会」を目指しているのではないか現政権は。
1957 年ニクソン副大統領は「国家的存亡の観点から行けば、死傷者が 3000 万人になろうとも 5000 万人になろうと違いはない、米国の安全は民間防衛ではなく核抑止による能動的防衛にかかっている」と述べた。
- 「原爆投下」であって「原爆攻撃」ではないのはなぜか。
- 女性の参政権は政治を変えたのか?・・・「権利の上に眠るな」(市川房江)
- あらゆる災害では、もともと弱者であった人が更に弱者となる(民族、性的少数派、障がい者、在日韓国・朝鮮人)
- 被害者、加害者そして共犯者としての女性。様々な視点がいる。
- 戦争体験者の死亡や高齢化により証言の不可能性がある。誰にいかにか何を伝えるか我々の責任。